

二木 立 著

日本の医療費 国際比較の視角から

西 三郎（愛知みずほ大学人間科学部）

著者の二木立氏は、臨床医で経済学者で、それぞれの分野で一流であり、特に後者としての氏は、現在のわが国での実証分析研究の第一人者であると筆者は思う。古くは、リハビリテーションでは上田敏と、社会科学では川上武と、医療経済学では江見康一等と共編著・翻訳をし、現在では、医療経済学に関する多くの単著を発刊し、それも売れる本を書いている。その背景は、科学的実証研究に基づいているからといえよう。

「まえがき」に「日本の医療費問題を国際比較の視角から実証的かつ批判的に検討し」、いわゆる「神話」「常識」を覆している。例えば、第1章で人口の高齢化、社会的入院が医療費増加の主因でないこと、第2章で医療技術進歩が単純に医療費増加をもたらすものではなく、医療費抑制策により操作され、過度の医療費抑制が「医療の質」を低下させること、第3章ではリハビリテーション医療の原価計算より、承認施設は好転し非承認施設では悪化していること、第4章では地域ケアの普及と医療費抑制とが直接結びつかないこと、第5章では医薬品に関してマクロ経済学から薬価の高いこと、ミクロ経済学から新薬の技術評価を含めて臨床経済学研究の遅れていること、第6章では80年代の医療法人病院チェーンの急増と勤務医師の給与水準の低下が現在も続いていること、等を実証している。

著者の実証研究は、科学的な実証に努め、基本的に国際的な研究成果と比較できる研究方法を採用している。この裏付けを得るために医療経済に関する

雑誌、図書を精力的に目を通し、引用文献をみてもその豊富さが明らかである。このため、実証していく過程を含めた論文であることから、個別の報告を追試できるように記述しており、丁寧に読むには多少しんどい面を含んでいる。なお、時間的な制約のためか、校正ミスと思われる事項がみられ、再版の際には、新しいデータによる追加のみならず訂正を期待したい。

本書の内容から、日本の医療費は、医療政策に大きな影響を受けていることが明らかにされた。本来、医療政策を論議するには、科学的な実証分析が基礎になければならない。しかしながら、広くこのような分析が行われることは、政府の力が相対的に弱体化することになる。このためか、実証分析に耐える調査も少なく、その資料の公開も進んでいない。著者は、直接国の政策に関与していない数少ない医療経済研究者であるために、資料の入手には多くの苦勞をかけながら実証分析研究に努めている。本書は、その成果の一部である。

国際的な動向をみても、これからの時代は、独占した資料による政策づくりから、資料を公開して広く科学的な政策づくりになることが必要である。この著者と同様に、在野で医療経済研究を手がける人が続出することがよりよい医療の確保のために不可欠といえよう。このためにも、本書を参考書として活用することを薦めたい。

(A 5 頁 288 3,708 円(税込) 1995 医学書院 刊)